

静岡県日中友好協議会

NEWS LETTER

No.130
2023.3



特集

静岡県・浙江省(義烏市)化粧品ビジネス交流会

静岡県・浙江省オンライン研修事業(介護・環境・日本語)
国際理解講座「いけばな教室」

交流往来・都市間交流～小山町と海寧市～

CHINA BUSINESS～日本産食品を中国へ～

中国report 「歴史建築物から寧波の今を見る」～老外灘～

浙江省の名酒を巡る旅～果酒～

History trip 「松本亀次郎の教え子～郭沫若～」

花暦 桃の花が彩る江南の春

古来「桃花」は、中国では最も美しく雅な花として、人々から愛でられています。春になると浙江省杭州市の西湖・白堤では桃の花が満開となり、新緑の芽を出した柳の木とのコントラストが織りなす美しい風景を楽しむことができます。西湖十景の一つでもある「蘇堤春曉」は、西湖を南北に貫く全長2.8km堤防で、その道沿いにはさまざまな木々や花が植えられており、訪れた人々を楽しめています。他にも、桃の花を楽しめる場所が、浙江省には多くあります。例えば、舟山の桃花島、「桃花村」と知られている富陽市新登鎮半山村や、千島湖では、3月中旬～4月中旬頃が見頃となります。

【特集】

「静岡県・浙江省(義烏市)化粧品ビジネス交流会」 — 対面交流、再開 —

2023年2月17日、静岡県経済産業会館にて、「静岡県・浙江省(義烏市)化粧品ビジネス交流会」(共催：公財)静岡県産業振興財団フーズ・ヘルスケアオープンイノベーションセンター、静岡県・浙江省経済交流促進機構)が開催されました。コロナの影響で、ここ数年、日中間往来がストップしていましたが、今回、義烏市訪日団(義烏市副市長を団長とする政府関係者6人のほか、化粧品類の企業：6社、管理サービス類の企業：5社)合計14人が来日し、静岡県側からは、企業6社15人が参加し、ついに対面交流が再開し、ビジネス交流会の開催が実現しました。



【義烏市訪日団】

今回の交流会では、静岡側からは、フーズ・ヘルスケアオープンイノベーションセンターの紹介や静岡県化粧品産業の概要説明、中国側からは、義烏市産業概要の紹介、義烏市化粧品産業の説明が行われた他、双方の参加企業が発言し、またフリートークの際には、今後のビジネス展開について、個別相談や交流が行われました。

義烏の化粧品産業は、1980年代半ばに始まり、40年にわたり中国国内最大の香水や化粧品の生産基地、CBC国家化粧品産業基地となっており、全国の化粧品メーカーも義烏市場を重視しています。4000社以上の中国国内化粧品企業の80%が義烏で総代理店を設け、売上高は主要な化粧品市場の最前線に位置しています。

一方、静岡県内にも、多くの化粧品メーカーの工場や高い技術を持ったOEM企業があり、全体で200社以上が立地しています。日本化粧品の最大輸出相手国は中国で、中国への輸出は近年急拡大しています。このビジネス交流では、現在日本メーカーとの直接交流はありませんが、今後日本との業務関係を発展させる意向のある中国企業も参加しており、情報収集や中国との取引拡大のチャンスとして交流の場が設けられ、日本から化粧品輸出の可能性を考える機会となりました。



【静岡側参加企業による個別ブース設置】

静岡県・浙江省オンライン研修事業

～両県省の交流を促進する人材を育成～

静岡県は、これまで270人以上の研修員を受け入れてきましたが、コロナ禍では人的往来が困難な状況が続き、研修生の受け入れができませんでした。そのため、今年度は介護・環境関連のオンライン研修事業を実施しました。

高齢者介護サービス講座は、中国からの関心が高かった「高齢者介護の概念」、「地域包括ケアシステムの役割」、「介護技術・知識」、「介護施設運営のポイント」をテーマに、4回実施しました。講師は、社会福祉法人駿府葵会とインフィック株式会社に依頼し、中国の介護関連施設の経営者や管理者、職員などが参加し、高齢者介護福祉分野の交流を深めました。

環境関連の講座では、「脱炭素化に向けた日本の動向と静岡県の取組」をテーマに、静岡県経済産業部エネルギー政策課の横井課長にお話しいただきました。

また、将来、静岡県への研修生として派遣されることを希望する方などを対象に、研修現場で使うことが想定される基礎的な日本語を中心として、オンラインで日本語基礎研修講座（全5回）を開催しました。講座では、ロールプレイで実践的な会話練習などを行ったほか、静岡県の紹介をして、理解促進を図りました。



国際理解講座「いけばな教室」

～“いけばな”とやさしい日本語を通してコミュニケーション～

2月19日(日)、焼津市で外国にルーツを持つ焼津市民と日本人市民が交流する国際理解講座として、「いけばな教室」が行われました。この国際理解講座も、コロナの影響によりここ数年開催されておらず、3年ぶりの開催となりました。

当日は、技能実習生や特定技能で働いている中国出身の方など合計13人と、日本人市民7人が参加し、「春が来た」をテーマに生け花を体験し、やさしい日本語を通してコミュニケーションをとりながら、相互理解を深めました。





交流の歩み、国際友好都市5周年

小山町と海寧市（かいねいし）は、1998年10月に、友好交流関係協定の覚書を締結し、その後2017年に国際友好都市を締結し、5周年を迎えるました。人口約109.9万人（2021年データ）の海寧市は、浙江省の北側にある位置する、嘉興市に属する県級市です。古来『魚米之郷、絲茶之府、文物之邦、旅游勝地（水産・農産物など自然資源が豊かな地域、絹とお茶を産出する地域、悠久の歴史と文化を有する地域、観光・景勝地に恵まれる地域）』と呼ばれ、錢塘江の逆流景観の地として知られています。海寧市は、皮革産業が盛んであり、浙江省経済10強県（市）、また全国農村総合実力100強県に入っています。2021年6月、地下鉄線で杭州と結ばれ、交通網が発達した上海、杭州、蘇州を結ぶ「1時間経済圏」の恩恵を受けている都市でもあります。

次世代を担う高校生、友好の絆を深める

小山町と海寧市は、1999年から学生・文化交流を実施しており、2018年からは、静岡県立小山高等学校と海寧高級中学校は国際友好学校となっています。近年は、新型コロナウィルスの感染拡大により、相互訪問交流が中断されているため、両校はWEB会議システム（ZOOM）を利用して交流を続け、今年も1月13日、オンライン文化交流を実施しました。「お互いの文化や習慣を知り友好を深める」という目的のもと、小山高校の生徒は、「自分達が暮らす小山・御殿場の紹介」を英語で行ったり、日本の映画「君の名は」をアレンジして小山高校と日本文化を動画で紹介したりしました。一方、海寧高級中学校の生徒は、中国楽器の演奏と書道の実演や、中国のフォークダンスの披露、中国詩の朗読を行いました。

発表後の意見交換では、海寧高級中学の生徒から、小山高校の部活動の数や御殿場プレミアムアウトレットの代表的な店舗について質問があり、小山高校生が英語で返答しました。また小山高校の生徒からは、中国でお薦めの文化について質問があり、海寧高級中学生が中国で有名な詩人について紹介しました。最後に、海寧高級中学からは、海寧市で有名な毛皮のスカーフと中国の詩が手書きされたポストカードを、小山高校からは、富士山の風呂敷とエコバッグ、お菓子などを記念品として贈り、両校の参加した代表生徒は、オンラインで親睦を深めました。

オンライン文化交流



【海寧高級中学校側のワンショット】



【小山高校側のワンショット】

日本産食品を中国へ

「輸出10年目を迎える企業からのご提言 ～着眼大局 着手小局～」

中国で販売されている静岡県産の食品は、クッキー、チューブ入りわさび、日本酒、缶詰などです。今回は、これらの商品が中国で売られるようになった経緯について、クッキーを中国に輸出販売している、三立製菓株（浜松市）の柴田利夫輸出事業部長に伺ったお話を、一例としてご紹介します。



静岡県中国駐在員事務所長
浅原敏治



【柴田利夫部長(右)】

1 中国市場への輸出を始めたきっかけ

日本の食品を、在日中国人が独自に中国に輸出し、販売する流れがあります。2012年に初めて渡航したときに、当社の商品が中国で店頭販売されている様子を見て、自社の商品が中国でも受け入れられると考え、2013年に輸出営業所を設けました。ちょうどこのころ行われた東京での展示会で、中国の流通事情に詳しい方と知り合い、その方の助言で輸出手続がスムーズに進めることができたことも幸いしました。

2 中国での販路開拓の取り掛かり

主に華南、華東エリアを中心に小売店、市場、卸業者を訪問し、展示会にも積極的に参加して、嗜好調査や当社の主力商品である「源氏パイ」の認知度を確認しました。また、取引先では社長室の備品などから世界的企業との取引があるかどうかを把握し、あるところとは、リスク回避のため、与信を踏まえて販売を行いました。

3 取引で特に気を付けたこと。苦労したこと

製造のキャパシティもあり、品薄時には日本国内の販売を優先するため、中国での販売量は慎重に決めるよう心掛けました。こうした中、取り扱い原材料の認可変更、模造品の登場、コロナ禍での船便の遅延、渡航不可などが唐突に起き、対応に苦労しました。

4 新たに中国に自社商品を売り込もうとお考えの方への提言

中国市場をご自分の目で確かめ、自社製品の優位性に鼓舞し、自信をもって、様々な方と話し、アンテナは高くすることです。荀子の言葉にある「着眼大局 着手小局（いつも大きな目標を持ち、その目標に向かって計画を決めて実行して生きて行くことが大切）」のとおりです。



【店頭販売の様子】

※いかがでしょうか。中国に食品輸出をお考えの方の参考になれば幸いです。

歴史的建築物から 寧波の今を見る ～老外灘～

ラオワイタン

静岡県立大学グローバル地域センター特任准教授
寧波大学外国語学院外籍教師
静岡県日中友好協議会交流推進員

横井香織



余姚江、奉化江、甬江の合流地点である三江口の北岸に、「老外灘」と呼ばれる場所があります。それは、かつてイギリス領事館、浙江税関、カトリック教会、寧波郵便局、商業銀行などとして使われた建物が並び、中国の伝統的な住宅建築とは対照的な欧風の雰囲気が漂う地域です。また、美術館やレストラン、コーヒーショップ、パブなども立ち並び、観光客だけでなく地元の若い世代や寧波に暮らす外国人に人気のスポットになっています。

三江口は、すでに唐代から中国四大港湾の一つで、鑑真和上はここから日本へ向かいました。また、ここは寧波幫（寧波商人）発祥の地でもあります。1840～42年のアヘン戦争後、清国は南京条約を結び、寧波は五大通商港のひとつになりました。開港後まもなく甬江の北岸は、イギリス、フランスなどの居留地として発展していきました。それが「外灘」です。「外灘」というと、上海のBund（バンド）がよく知られていますが、寧波の「外灘」の方が上海より20年ほど古い歴史があります。

寧波の貿易を支えたのは、「寧波幫」と呼ばれている同郷の商人集団です。寧波が通商港としての重要性を帯びたことで、甬江沿岸一帯は寧波人の商業活動の舞台となりました。やがて、寧波商人は上海へ集中的に移住し、清末の上海経済界で重要な地位を占めるようになります。寧波商人は、錢莊業や海運業などに従事し、有力な商人集団として成長していきました。錢莊というのは、中国の旧式の金融機関です。寧波商人の錢莊は、現金を授受せずに帳簿上で出入額を記載する「過帳制度」を用いて、大口の商業取引を促進しました。寧波の錢業会館は、当時の錢莊の姿をほぼ完全な形で保存している博物館です。会館には、寧波金融業の発展を記した碑文や歴史的モニュメントが残されています。



【寧波の錢莊】

(出典：<http://www.360doc.com/content/23/0131>)



【寧波老外灘】
(出典：「寧波晚報」2021.7.15)

寧波という都市は、北京や上海ほどの繁栄ではなく、中国の地方都市のひとつにすぎないかもしれません。しかし、唐宋代から東アジア海域交流の拠点で、あちこちに歴史の重みを感じる建造物が点在しています。寧波料理を味わいながら寧波の街歩きをする旅に、富士山静岡空港からの直行便が再開したら、ぜひお出かけください。

浙江省の名酒を巡る旅 果酒

中国では、「果酒」と呼ばれる伝統的な果実酒に「楊梅酒」があります。楊梅（ヤマモモ）の果実を原料として使用し、砂糖と米麹などの材料と一緒に発酵・蒸留されてできたのが「楊梅酒」です。梅雨の頃に、実をつけることから、名付けられたと言われる楊梅（ヤマモモ）は、暑さに強く、耐乾燥性に優れた植物であり、浙江省、福建省、広東省、広西チワン族自治区などで広く栽培されています。「楊梅酒」は、中国の伝統的な文化に根付いた酒の一つであり、中国国内外で愛される酒の一つとして広く知られています。

果実酒の代表格「楊梅酒」



楊梅〈日本名：ヤマモモ〉は、浙江省では寧波市下の余姚（ようよう）市の特産として知られています。6月中旬～7月初旬が滴下の盛期を迎え、その瑞々しい果実は、そのまま食べても柔らかくて甘酸っぱく、とてもおいしいですが、24時間ほどしか日持ちがせず、鮮度がすぐに落ちてしまいます。

そのため、地元ではこの楊梅（ヤマモモ）を「白酒」（蒸留酒）に1ヶ月ほど漬けて「楊梅酒」を作り、年中、楊梅（ヤママモ）を楽しめるようにしました。余姚市では、瓶詰めされ市販されています。地場の「楊梅酒」は、アルコール度数は40度以上もあるため、一気に飲むと酔いやすく、ゆっくり味わったほうがよいとされています。また「楊梅酒」は、漬け込んだ楊梅（ヤママモ）を1個食べるだけで、腹痛や暑さ負けに効果があるといわれていますが、相当量のアルコールを含んでいるので注意が必要です。



拡大する中国の果実酒市場

中国のアルコール市場では、低アルコールにした果実酒は20歳から30歳代の若い女性に人気があり、特に都市部に住む人達が主力消費者になっています。中国では荔枝（ライチ）酒、枸杞（クコ）酒、梅酒、桃酒など、様々な種類の果実酒が季節ごとに登場して、季節感のある果実酒を楽しむことができます。また、市場に出回る、こうした果実酒は、白酒やビールに比べてアルコール含有量が低くて飲みやすく、また果実酒は栄養価が高く、ポリフェノールが多く含まれ、健康にも優れているとも言われています。



松本亀次郎の教え子 郭沫若



【郭沫若】

郭沫若（かくまつじゃく）は、中国の現代文学者・歴史学者・古文研究者で、國務院副總理・全國文學藝術連合会主席・中日友好協會名誉會長などを歴任した政治家・社会活動家です。郭沫若も多くの中国人留学生が学んだ東亞高等予備学校で、松本亀次郎の薰陶を受け、日本語を学んでいます。青年期に10年間（1914-1923）日本に留学し、壮年期に亡命で日本に10年間滞在していました。

1892年に地主である郭家の8番目の子として、四川省嘉定府樂山県で生まれた郭沫若（本名は郭開貞）は、まだ物心のつかない頃から母親の啓蒙教育を受け、漢詩の手ほどきを受けました。この影響で学問に目覚め、また西洋の書物や日本への留学経験を持つ兄達の影響から、郭沫若是中学校に入校した頃から、海外への興味を示し、1914年に日本へ留学します。

来日後当初は、「一生涯もっとも勤勉な時期」を過ごしたと記している、日本語学校で日本語を学び、その後第一高等学校予科

に入学しました。医学を勉強しようと考えるようになった郭沫若是、予科を3番目の成績で卒業すると、岡山の第六高等学校第三部医科に進みました。1918年9月には九州帝国大学医学部に入学します。しかし、医学部での解剖実習がきっかけで創作意欲を抱き始め、子供のころから興味があった文学への意欲が再燃し、熱狂的に詩歌創作を行っていました。一方で、難聴により打診と問診がうまくいかず、医業に従事するには大きな支障となることから、医師になることを諦め、文学の道へ進むことになりました。

日本留学中に、随筆家・ヒューマニストであるホイットマンなどの思想を受け、文学の道へ進むことを決意した郭沫若是、南昌蜂起に参加したことで蒋介石に追われる形で日本へ亡命しました。また、生涯で3度の結婚を経験し、一人目の妻の時には、結婚後わずか5日後に家を出ていたと言われています。その後、日中戦争が勃発すると、結婚した日本人妻、子供を置いて中国へ帰り、戦後は日本に戻ることなく中国で別の女性と再婚し、86歳でこの世を去りました。



松本亀次郎記念公園にある石碑

ペンネーム・郭沫若の「沫」と「若」は、故郷の川の流れを懐かしみ、日本留学中につけたペンネームです。1935年に刊行され、松本亀次郎が編集総顧問を務めた雑誌『日文研究』で、題字を郭沫若が揮毫し、郭沫若や同じく松本亀次郎の教え子である魯迅などが寄稿しています。